熊野の自然や町と一筆書きにつながる体験交流施設

筆の都」として受け継がれてきたモノづくりの精神や技術力、柔軟性を体現した熊野の新たなシンボルとなる施設を提案します

業務の実施方針

くまのの魅力を体感できるここだからこその施設をつくる

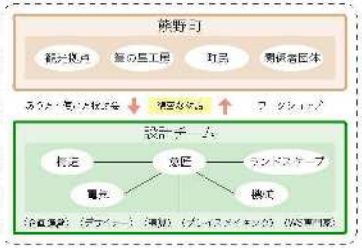
・体験交流施設を町の財産とするために、周辺環境との調和性を重視し熊野の地勢や文化、風情と結びつく地域に根ざした建物をつくります。この実現のために３つの「つくる」コンセプトを掲げて取り組みます。

1. 熊野町に根ざしたここだけの施設をつくる
2. 施設建設を通して交流の輪の連携をつくる
3. 町民が自慢したくなる町の新たなシンボルをつくる

取組体制

対話によるプロセスと共につくることを大切にする取組姿勢

・施設のあり方や使い方を熊野町をはじめ、筆の里工房関係者や町民から細密にヒアリングし、対話による柔軟な姿勢で業務を遂行します。
・設計がスタートしたらすぐに関係各者からなるプロジェクトチームを立ち上げます。チームで目指すゴールを共有、ワークショップを積み重ねて優先順位を明確化し、オンリーワンの施設づくりを行います。
・模型やパースなど目で見て内容を共有できるツールにより関係者間でイメージを膨めながら完成までのプロセスを大切にします。丁寧に確認を行い、全員が完成までワクワクする、愛着のある建物をつくります。



プロジェクト・チームの構成　　ワークショップによる対話を重視

設計チームの特徴

確実性・柔軟性・チャレンジ志向を兼ね備えた若手チーム

・若手設計者を中心とし、新しい技術にチャレンジして現代だからこその建築を目指す多様性に富んだチームです。類似施設での豊富な経験と、多くの協働実績を活かした迅速さ、ソフトワークの軽さが強みです。
・周辺環境や特性、条件を読み解き、多角的な検証によりこの場所だからこそつくられる施設を提案し、ここだけの提案を行います。

建築意匠（統括）

・周辺環境を読み解き、特性や条件、その場所だからこそできる建築の姿を大切にします。交流施設の豊富な設計実績から、デザイン性と機能性、コストや工程、品質管理など、バランスの取れたきめ細かい対応で業務を確実に遂行します。

構造（協力事務所）

・意匠を踏まえ経済性や施工性、敷地条件に適した工法をトータルに捉え、柔軟かつ合理的で安全な構造計画を提案します。同種類似施設での設計実績が多数あり、３次元立体構造解析による新しい構造架構の可能性を追求します。

電気 / 機械（協力事務所）

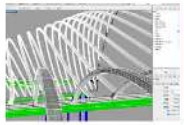
・BIMや３次元流体解析を導入し、自然エネルギー、再生エネルギーの活用、ZEBやライフサイクルコストに配慮し、施設の規模や形状、用途に応じた細やかな設備スペックを提案します。広島県内で多数のプロジェクト実績があります。

ランドスケープ（協力事務所）

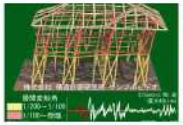
・既存の自然環境を積極的に活かし、土地の風土や植生、生態系と調和する景観づくり、その土地の自然素材を使うなど、環境に配慮したランドスケープデザインを提案します。国内外で大小様々な規模の公園設計の実績があります。

現代ならではの最新技術を活用したインタラクティブな設計

・３次元CADや立体構造解析、熱流体解析等、各分野での最新デジタルツールを用いて現代ならではの技術を集結したインタラクティブな設計により、後世に引き継がれていく先進的な施設整備を目指します。



３次元CADによる検討



立体構造解析による検討

環境シミュレーションによる検討

特に重視する設計上の配慮事項

日常的な地域だんらんの交流拠点として施設を考える

・町民が暮らしの延長として気軽に使えるリビングのような場所を施設内のカフェやラウンジにつくります。日常的に誰かがいるにぎやかな状況が、地域外の人々を誘引します。
・施設の管理運営または運用においてはルールに自由度を持ち、地域住民が積極的に施設に関われる仕組みを導入することで、地域内のコミュニティ醸成の場とします。日常的なコミュニケーションは昨今の頻出する災害に対する臨機応変なコミュニティ態勢の強化につながります。

町のリビングのような場所

地域住民参加による維持管理

ボランティアの地域資源活動の場

体験交流施設と公園のランドスケープの融合

・建物単体を新しく整備するのではなく、公園のランドスケープと一体となった環境を整備します。建物とランドスケープが融合した施設は訪れた人にまた来たいと思わせる魅力的な場と風景を形成します。

建設をきっかけに町民とものづくりを通した交流の場をつくる

・設計と同時に町民が施設づくりに参加するきっかけをつくります。例えば食は地域を特徴づける要素の一つのため、企画開発し施設オープン後はカフェで販売するなど、町の魅力向上と持続的な交流の輪をつくります。

建設をきっかけに町民が集まる場

食の企画開発の例

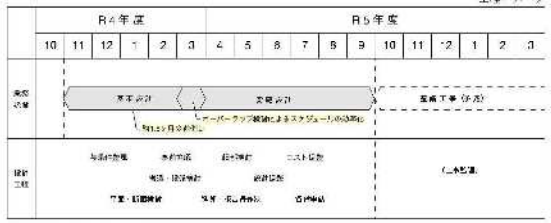
建物をあしらったお菓子の例

コスト管理に関する工夫及び管理方針

実勢に基づく徹底した細かなコスト管理

・昨今の建設コスト急騰によりコストコントロールが困難ななか、予算内での実現のため、業務受託後は同種類似物件を多く扱う積算チームと一体となって徹底したコスト管理を図ります。効果率からコストを検証し、実勢単価を考慮しフェーズ毎にこまめに設計にフィードバックして後戻りがないよう遂行します。
・フロントローディング型（前倒し）工程管理により、実施官庁等協議や地盤調査など不測の事態に備えを確実な工程計画とします。
・基本設計で約1.5ヶ月の前倒し設計を行い、基本設計段階から不測対策や余裕を持ったコスト調整期間、実施設計の前倒しも可能な計画とします。
・コストの比重が高い構造躯体については、県内で伐採・加工可能な木材をもとにした最適かつ安全な構造形式や構法のバランスを基本設計段階から検討し、実施設計をオーバーラップさせた前倒しの設計を行います。

工程イメージ



□ 工事費概算

※想定建設工事費５億円（税込）　　※建設時期によって変動する可能性があります

共通仮設	8,125 千円	外構工事	11,500 千円
建築工事	281,147 千円	さく井工事	6,000 千円
機械設備工事	84,909 千円	諸経費・税金	71,845 千円
電気設備工事	30,364 千円		
昇降機設備工事	6,000 千円	合計	499,890 千円

大屋根広場でのマルシェの様子

一筆書きにつながる体験工房

情報ラウンジ

カフェとショップ

体験工房とパークギャラリー

テーマ（ア）施設機能について

様々な体験や風景が一筆書きにつながっていく多彩な施設

・街道の巨公園の中心に位置する体験交流施設は、どこからでも人々を迎え入れるように全方位に開かれています。計画地にある約2.5mの高低差を均すように一筆書きの回廊空間をつくり、筆の三工房から公園に至るまでの様々な体験が途切れることなくスムーズにつながります。
・雨天によって風の強さが絶えず変化する曖昧な特徴を空間形成に置き換えることで、ここだからこその建築的必然性が生まれます。来訪者は回廊を巡るなかでめくるめく展開する街道的な体験ができます。

① 大屋根広場

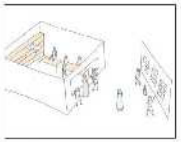
雑踏に訪れると大きな使い勝手の建物が住宅地の風景に違和感なく馴染み出迎えます。ここでは不定期ですがマルシェが開かれたり、来園者や作業つながりのイベントが行える全天候型のスペースです。広い軒下は作業者の分煙スペースとして利用できます。

② ふでにわ広場（中庭）

公園全体の中心に位置する中庭です。東西南北からも容易にアクセスできます。広く通風しの良さが特徴です。イベントが行われる際にはオープンステージ形式の舞台となり、観客席は高低差を活かして階段状に配置されます。

③ カフェ・ショップ

大屋根広場と管理事務室のすぐ近くに位置するショップ兼カフェテリアです。開放的な空間に面したカウンター席からは内部の自然が満喫できます。家族連れなど6人で利用可能な丸い大きなテーブルも3席配置されています。

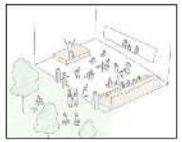


④ 作業所ギャラリー

木製学習工房へ向かう途中に通るギャラリーです。作業所での作業の様子が見えるように窓が設けられており、来訪者は作品を見るように雑踏空間の様々な風景を眺めることができます。裏庭を通って見せることで興味感を高めます。

⑤ 体験学習工房

様々な制作活動に応じられるよう可動壁仕切りで分割可能なワンルームスペースと、廊下や裏庭をショットアウトできる分煙のスペースがあります。大きな窓からは緑光や夜景ならもちろん、中庭の様子や周囲の大自然が望めます。



⑥ 多目的ホール

イベント時は200人程度を収容できるオルチバーパスな大空間です。作品の展示会の他、可動のカーテンを使って映画や音楽会など柔軟に対応できるホールです。全開口ドッシを開け放つことで中庭と一体で使うこともできます。

⑦ 情報ラウンジ

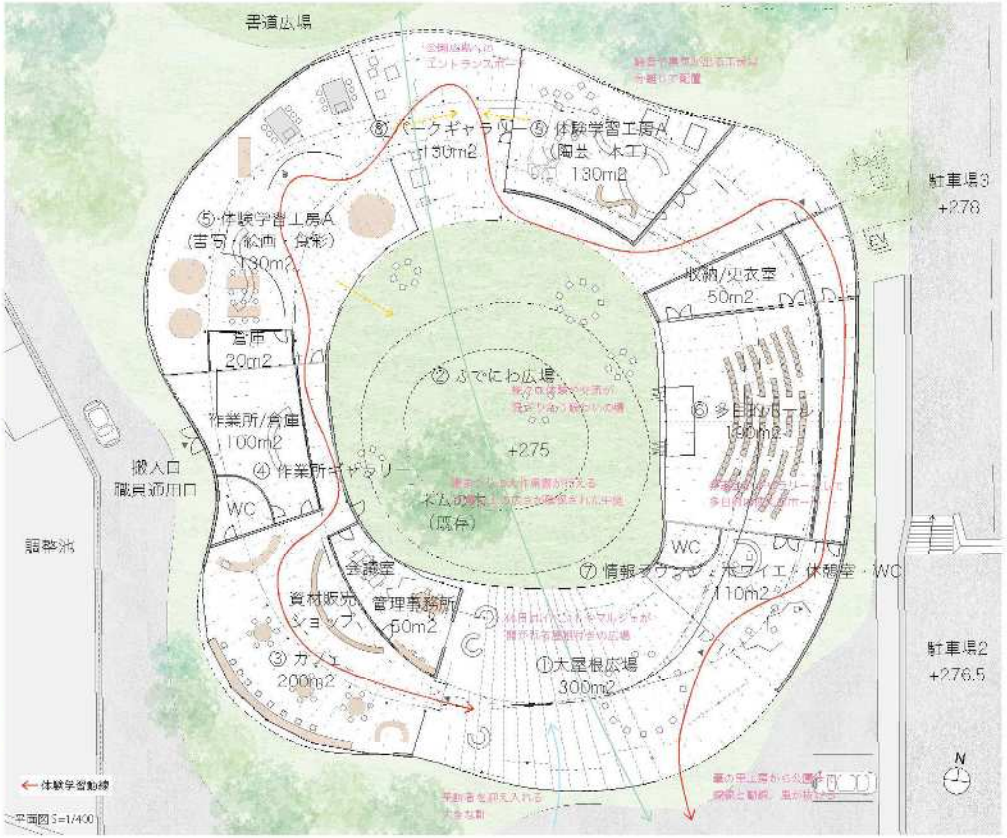
大屋根広場に隣接し、各コーナーのオアシスとして使える複合機能を備えたラウンジスペースです。観光客は観光地や街に関する情報を図書に得ることができ、町民は気軽に訪れることができる町のリビングのような場所です。

⑧ パークギャラリー

作業所と学習工房の間に通り、公園のエントランスポートを兼ねた半屋外のギャラリーです。工房での作業の延長として使ったり、彫刻工房で作った作品を飾ったりと多様な使い方ができます。自然光を活かした作品展示など、さまざまな使い方ができます。

⑨ 茶室（鐘楼庵）

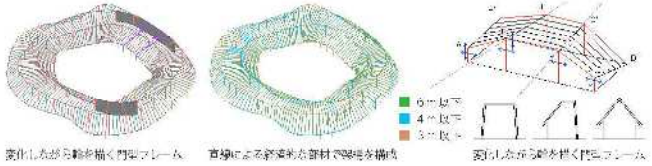
茶室は公園の緑の中に隠れるようにして、来客に気を遣わずにアプローチを行ったり非日常の世界をつくることができます。穏やかな交流雑踏とは少し離れを取ることで、様々な異なる体験が与えます。展望台からは森に囲まれた茶室が見え、

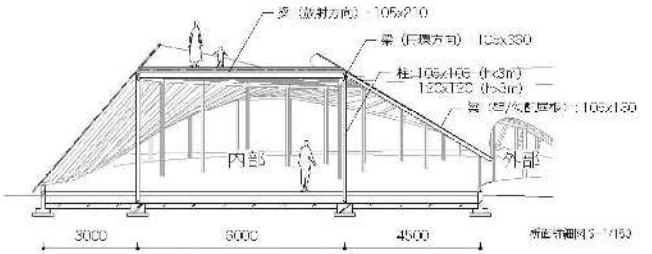


テーマ（エ）経済性・実現性について

形状を活かしシンプルで合理的かつ経済性と施工性に配慮した構造体

・木造の門型フレームを繰り返し放射状に並べ、それらを梁で繋ぎ固定するシンプルな構成です。断面形を場所ごとに変えながら軸力が常に圧縮で安定した構造です。
・屋根面と壁面が連続して地面につながり、地震力を効果的に伝達します。耐力壁の部分的な省略が可能によりコスト削減と開放性の高い空間を実現します。
・架構は長尺材を多用できるよう製材を採用し、過剰断面に集成材を使用します。部材長さを6m以下に抑えながら緩やかな曲面を直線材で近似することで施工性に配慮、工期短縮とコスト縮減を目指します。

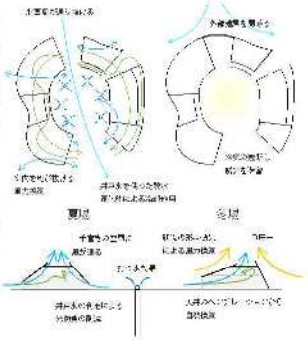




・地質調査報告書から、軽量な低層の木造建物及び布基礎形式とすることで地盤への負担を最小限に抑えます。材料費や輸送費、人件費のコスト削減を積極的に行います。

建物の形と地の利を活かしライフサイクルコストを抑えた環境設備計画

・近隣情報から計画地は井戸の活用が見込めます。中庭に散水することで気化熱による冷却効果を利用し、建物からの輻射熱を大幅に抑え施設管理費の軽減につなげます。
・計画地には北西風が吹くため、敷地は中庭に風を通すことで自然通風による空調負荷を削減します。散水による相乗的な打ち水効果も期待できます。各場はパークギャラリーの外部建具を閉じることで、冬風による冷気を遮断し暖気を滞留させます。
・一筆書きの室内外開口部を開け放つことで風が循環し、重力換気により空調負荷を軽減します。また、天広がりの建物形状が上昇気流を促し、重力換気が容易に行えます。
・空調は利用形態に柔軟に対応できる個別空調とし、布基礎の浸入熱源を有効活用した床吹き出しによる居住域空調を行います。



屋上展望台から熊野の町を見る

ランドスケープとのつながり

ロータリーからの眺め

多目的ホールと中庭がつながる

スロープ広場からの眺め

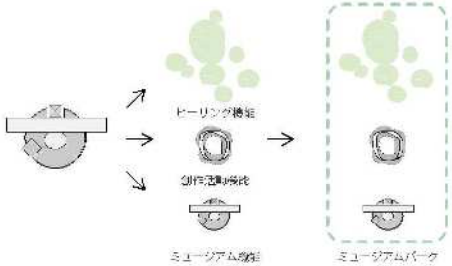
テーマ（イ）連携機能について

周辺環境と柔らかく混ざり合い連携の輪を築く建築

一筆書きの動線は筆の里工房から北側に広がる公園までつながり、創造の丘公園として景観の輪を形成します。計画地より4.5m高い東側の駐車場からはブリッジで展望台にアクセス可能で、そこから中庭の賑わいや一筆書きの交流施設、熊野灘を一望できます。

それぞれの施設が補完しあって全体で機能する新しい姿

・筆の里二房の体験コーナーを交流施設に集約することにより、筆の里二房は知識を吸収するミュージアム機能、体験交流施設は知識を表現する創作活動機能、公園は知識を整えるヒーリング機能として、公苑全体がミュージアムパークとして魅力的に機能します。来訪者は施設の生格が明確になり動わやすくなります。



ここにしかないサステイナブルな公園のランドスケープ

・輪っかの様々な広場を公園に点在させることで、筆の里工房や体験交流施設が一体的に繋がります。筆文字にしかできないぼたぼた表現のような、ここにしかないランドスケープです。
・現況のGH-279～GH288付近には約20%の傾斜があり、熊野の町や山並み、坂南大池が一望できる展望にちょうどいい広場になります。既存の地形を活かし造成コストを抑制します。
・移設する鐘楼庵を公園内の茶室広場に配置し、森の窪地を抜けて非日常の世界へと誘います。公園と混ざりあった茶室が望める体験交流施設の展望台は絶好のビュースポットになります。
・シロツメクサを多めに使用したミックスの芝生は柔らかく使いやすいローメンテナンスの芝生になります。水やりは初年度のみ、肥料コストを削減、雑草が入りにくく刈り込みも通常の芝生より少なくすむため、サステイナブルな緑の維持です。

20%スロープの傾斜
(Parc des Buttes-Chaumont, Paris)

ローメンテナンスで使いやすい緑
(Biblioteca degli alberi, Milan)

持続可能なミックスの芝生
(Smithsonian Museum, Washington)

公園との連携がさらに町全体に波及して広がる交流の輪

・ロータリー部分は待合やふれあいの場として整備します。輪っかの広場を設けることで視覚的にもつながる広場とします。
・中庭のふでにわ広場は筆まつりの催しを行える広さがあり、観覧者が屋上から観覧できるオープンステージ形式になっています。現在の森広場で開催されている大作席書を隔年でふでにわ広場や書道広場で行うなど、恒例行事の趣を変えることで町全体に賑わいの輪が広まり、町の魅力向上につながります。

中の里工房から見る

屋上からイベントを見る

テーマ（ウ）象徴的機能について

熊野の地勢や風景・筆の文化と結びつく「なんかいい」町のシンボル

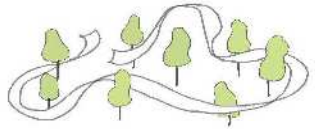
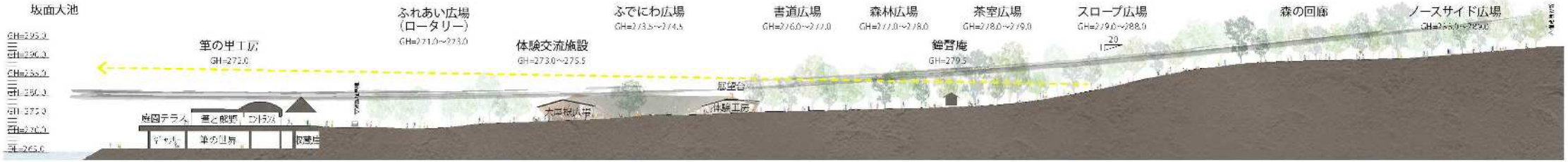
山々に囲まれた熊野の地勢を縦型にしたような、蛇行や様紅さといった筆使いの特徴を想起させるような動きのある形をした体験交流施設は、町民にとって親しみやすく熊野らしさが感じられる地域に根ざしたちょうどいいシンボルとなります。

輪の形をした熊野の地勢

紀伊半島の山並みの風景

筆祭りでの大作席書の観覧の様子

熊野の自然や風景と柔らかく呼応する形


波をキャンバスに筆で絵を描いたようなイメージ

道路からの眺め